

トピックス
1. 播州日誌 専門家と呼ばれる人
2. 南国土佐を後にして 第18回



福留経営労務管理事務所  
姫路龍馬会  
保険労務士・行政書士  
福留 章

# 龍馬通信

No. 74

2024年2月号

立春～雨水の候

大自然の驚異

枯れ木のように見えても  
よくよく見ると  
草の芽や木の芽が  
わずかに用意されている  
冬萌え（ふゆもえ）という

植物も落葉の後  
冬眠して 春の芽吹きの  
準備をしているのかも  
そういえば  
落葉樹が紅葉する時  
その色が鮮やかであればあるほど  
きれいな花が咲くとか

節分で鬼を追い  
立春を喜ぶ  
わずかばかりの  
春の兆しに 一喜一憂する  
生き物たちと同じように  
心のどこかに  
春を待ちわびる 小さな  
心が動いている

大自然の優しさが  
春を待つ人々の 心を  
騒がせる



2024の幕開け  
大自然は 最悪のタイミングで  
その怒りを爆発させた



際限なく  
環境破壊に まい進する  
人類への警鐘かもしれない  
それにしても非情そして無情  
苦しみや悲しみが  
ようやく和らいだと思う頃  
災禍は再び訪れる

人の命を奪い  
あらゆるものを破壊する  
親子や家族の絆を絶ち  
地獄の苦しみを運んでくる  
神も仏もない

人と人との信じあい  
人類を愛し  
微力ながら 大自然の  
驚異に抗っていく他に  
道はない  
道ははるかに遠いが  
努力する意味はある  
人類は 絶望しない



# 播州日誌

## 専門家と呼ばれる人

令和6年は大変な幕開けとなった。元日の夕刻、震度6強の地震が能登半島を襲った。大津波警報も発令され、実際に第一波は数分後に到達した。NHKの女性アナウンサーの悲痛な叫び声のような調子で「逃げてください」「今すぐに命を守る行動をしてください」という声が今も耳の奥に残っている。能登といえば数年前にも震度5の地震に見舞われており、前3年間に群発する地震は数百回に及んでいた。つまり全くの想定外の地震ではなく、予測できた地震だと言える。

世の中に専門家と呼ばれる人は多くいる。大学や大企業などで専門的な研究を続けている。それは理解できるし、地道な研究の大切さは解る。しかし専門家がその知識や教養を、もっと世の中に活かせられないものかといつも思う。大事故や大災害の後には必ず専門家と呼ばれる人が出てきて蘊蓄（うんちく）を披露する。事前に警告を発するとか警鐘を鳴らすことによって、少しでも被害を減少させることが出来るのではないかと思う。事態が発生してからの結果論はいわば言い訳に過ぎないと思う。地震の予知など警告が社会不安を引き起こすことも考えられるが、もう少し自分の研究について自信を持ってもいいのではないかと思う。「私は1か月前から予測していた」などと週刊誌に自慢げに書く事はやめて欲しい。知識や教養は世のため、人のために活かされてこそ、本当の知識・教養となる。専門家と呼ばれる人達の、奮起に期待したいと思います。

2024. 1. 12

## 私の1.17

あれからもう29年の月日が流れた。平成7年1月17日午前5時46分。阪神淡路地方を襲った震度7の地震は、死者6433人、全壊家屋10万戸はじめインフラの被害は甚大なもので、未曾有の大惨事となった。姫路でも震度4。私はまだベッドにいたが、ゆらりゆらりと横揺れの後、ズシーンと縦揺れが来た。隣のベッドにいた家内に「大丈夫、落ちついて」と声をかけ、NHKのTVを見る。神戸市中央区の消防局の道路に高齢の人が二人身を寄せ合って座り込んでいた。アナウンサーは、阪神淡路地方を中心に、相当な被害が出ているようだと報じていた。当時私は前年の秋に会社を追われ、失業中だった。社会保険労務士の資格を取るために大阪へ通学し、通信教育も受けるという掛け持ちの受験生だった。その日から4~5日間はTVに釘付けになっていた。とても受験勉強どころではなかった。私は神戸の長田区に生まれ小学3年生の夏まで暮らした。その故郷が紅蓮の炎に包まれて、三日三晩燃え続けた。消防にあたる人もなく水もなく、ただ燃えるがままの我が故郷。新長田駅も、六軒道も大正筋商店街も、すべて灰塵と化してしまった。まるで戦場の焼け野が原のような惨状。涙があふれてTVの画面がにじんで見えた。失意の底にいた私に、さらなる悲報が追い打ちをかけた。悔しさと寂しさと。1週間ほど過ぎて旧知の人から電話があり「章ちゃんの住んでいた家、焼けずに残っているよ。本当に奇跡的に」。思わずありがとうございます、ありがとうございますと礼を言ってしまった。復興の槌音は糸余曲折、大波小波の繰り返しではあったが、かなりの速さで復興を果たした。全国から寄せられた支援の数々は暖かいものであった。後にボランティア元年と言われた阪神淡路大震災は、その後の災害復旧のシンボル的存在となった。災害列島日本は、その後も大小の災害をもたらし、そのたびに多くの人が犠牲となった。

通学が通信制になり数か月。新快速が復活し再び大阪へ通学を始めたのは4月の中旬だった。8月の受験を目前にして猛然と挑戦の炎を燃やした私は、試験前の錬成テストにほとんど皆勤し常に首席を通した。家庭の事情



で正に背水の陣であったし震災の後の「復興の槌音」が私の背中を押した。2回の全国模試も好成績。満を持して受験に臨むことが出来た。11月1日の合格発表を3日の日に受け取った。合格の喜びを明日への糧にして、人生再出発の日（開業）に向けてさらに学びを続けた。平成8年1月1日、自宅において開業。その後の私の人生は、阪神淡路大震災の復興の歩みとともにあった。

あれから29年今年で社労士として満28年になり29年目に入ったことになる。震災と重なる私の人生の歩みは多くの人に支えられてきた。今の喜びに感謝しつつ、さらに教養を重ねて現役を続行していきたいと思う。

2024.1.17

## 第9回

## 社労士 野口 亮 がゆく



「訪問依頼あり、K市に向かって高速道路を走る。今月下旬にストレスチェックについて、労基署の監査があるので打ち合わせをしたいとのこと。ストレスチェックはストレスのコントロールの大切さと、うつ病予防の第1予防として「本人の意識（気づき）」を促すことを目的に、5年ほど前から50人規模以上の会社に義務付けられた。いわば「こころの健康診断」である。制度導入頭初からその効果や運用の難しさが言われていた。受検が任意であること。産業医が全体を主宰すること。事業主がその結果を見ることが出来ず、答案の原本は産業医が5年間保管すること。外国人用のものがないこと（最近になって多言語化した）。など明らかに実現不能の制度設計である。検査後の集団分析は努力義務になっている。衛生管理者と本部長と面談する。監査の内容については不明な点が多いので、今回指導を受けて、それを実施していくことにするという対応を決定。集団分析については、1月の安全衛生委員会の中で私が担当し、議事録に載せることにした。その他有害化学物質のリスクアセスメントの監査もあるということなので、今あるものを見せて、問題があれば指摘していただくこととした。もちろん当日の立ち合いは了解した。

事務所への帰途、SC制度の改善は絶対に必要だと思った。今のままだと次第に受検者が減少することは必至だ。質問内容の再検討、制度全体の見直しを切望する。

## 創作 ショートストーリー 土佐のしばてん

土佐高知に住み着いた妖怪、通称「しば天」。色々な相談に応じて住民の信頼を得ている。しかし今度の相談には、はたと困ってしまった。今年降水量が多く水不足とは縁のない土地柄と思われた土佐の高知が、異常気象から大変な水不足になり夏のカンカン照りに農民たちは思案投げ首。このままでは稲の収穫が出来ず飢饉に落ち入るのは必至の状況。雨乞いがあちらこちらで行われたが一向に雨雲がわかない。従来水不足の心配がない農民たちは水の心配をせず、水の扱いがいい加減で、村ごとの取り決めもないがしろにするものが多く、何でも酒でごまかすような気風があった。困った時の神頼りと最後にしば天に白羽の矢を立てた。庄屋をはじめ百姓うちそろってしば天に迫ってきた。

「おら神様でも何でもないでよ。無理むり・・・」と逃げを打ったが、彼らは根が生えたように動かない。二つ返事で引き受けたものの今度はしば天が思案投げ首。神棚らしきものを作って祈祷を始めたが、途中で差し入れの酒を飲んで寝てしまう始末。



ある夜、しば天は神様の声を聴いた。たぶん神様、否たぶん神様よりも大いなるもの。「雨は二日後に降る」「お前はこの機を逃がさず、農民たちを教化せよ。自然の環境を守り、お互いに決まりを守り、常に飢饉に備えて水を大切に扱い、ため池を作って水を貯めておくこと」。不思議な声は一瞬のことで、長いものではなかった

が、妖怪のしば天には、はっきり聞こえた。天の摂理で雨はいずれ降る。それがたまたま二日後だったのだ。

空に黒雲が沸き起こり、激しい雨となって大地を潤した。農民たちは手を合わせて天を仰ぎ雨に感謝した。しば天は農民たちを集めて、不思議な出来事を告げて、普段の生活の中で感謝の気持ちを忘れず、規則を守る気持ちを大切に、隣人あい和し、暮すことの大切さを説いた。

この度のことをきっかけに、皆が同じ方向を見て生活することを学んだ。水不足になるような異常気象もなく、平和な暮らしがこの後長く続いたと・・・。

「よかった、よかった、まっこよかったです」

## ～南国土佐を後にして～

### 第18回 「東京編」

### 酒とさけと・・・。

酒は随分早くから飲んでいた。2回生（20歳）になってからは本当によく飲んだ。タバコはなぜか体質的に合わず殆ど吸わなかった。ゼミに入って、先生を囲んでのコンペが年に数回開かれた。焼き鳥屋さんが多かったように思うが、会費は1000円程度だった。先生が毎回、サントリーの角を差し入れてくれた。大概その半分ぐらいが残る。そのたびに先生が「酒は土佐の福留にやる」と言って残りの酒をくれた。それを大事に持ち帰りチビリチビリ飲んだのを覚えている。私の親爺は息子に何も残さなかったが、私には丈夫な肝臓を遺してくれたようだ。

その後の人生は酒浸りと言ってよく人生の潤滑油だと思っていた。第一素面（しらふ）の時と酒を飲んだ時と、二つの人生を味わえるのだから飲まなきゃ損だ。出張の多かった兄が帰ってくるとよく船橋の「樽いち」という寿司屋でおごってもらった。築地から直送のマグロの味は忘れられない。陳列用の冷蔵庫があって一斗樽がデーンと座っていた。たる一丁と注文すると大将が栓をポンと抜いて急須のようなものに酒を取り、それからおもむろに皿の上のカップに注ぎ入れる。少し多めに入れて皿にこぼす。客はまずその皿の分をずっと飲みそれから表面張力したカップの酒に口をつける。これがまた丁度の冷え加減でうまい。酒を舌の先に乗せてくるくる回すと、コロコロと酒が転がるのである。その余韻を楽しみながらぐいと一息で半分ぐらいを飲み干す。まさに至福の時。世の中にこんなうまい酒があるものよと、ふたつみつ程はいく。金を払う兄からは調子に乗るなどよく怒られた。

酒のことならもう一つ。もうすでにどこかで書いたかもしれない。忘れられない酒がある。珍しく大雪が降って、津田沼からの新京成が運休していてやむを得ず京成電車で少し遠くなるが習志野駅に向かう。電車を降りてアパートの方向へしばらく行くと、屋台が出ていて赤提灯がゆらりゆらり。財布の中はちょっと寂しい。何とかなるだろうと暖簾をくぐる。お姉さんが一人、客はなし。熱燗一丁と焼き肝の白（安い方）を注文する。赤肝のうまいことは解っているが我慢をしてもう一杯を狙う。「学生さん？・・・」「はい日大の法学部です」「ああそう、色々と大変でしょう、学費とか・・・」「ええまあ・・・」「わかった。姉さん赤肝おごるわ、食べていって・・・」世のなかに神様のような人がいるもんで、天にも昇る気持ち。赤肝2本で酒2合、外はちらちら雪模様。もう記憶も薄れたが「また 来てみてね・・・」に送られて、歩き始める。風呂上がりのようにホカホカと体も熱く、すっかり酔って千鳥足。その後アパートに到着するまでの記憶はない。



それなりに酒には自信があって、酒の上の失敗はない。あまりない。ただ一度だけコンペで飲みすぎ、御茶ノ水駅のベンチで寝てしまい、終電で起こされるまで寝入っていた。その間、財布を抜き取られ（もっとも金はほとんどなく、盗った奴が気の毒なくらい）幸いにも学生証などは無事だった。駅員さんに厳重注意され、一番電車まで事務所にいさせてもらった。